

トビウオ通信 (H22 第7号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)
http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《平成22年漁期のトビウオ類及び上半期のマアジ漁況》

県の漁獲統計システム(TACシステム)により集計した県下漁業協同組合の漁獲統計資料(属人)から平成22年漁期のトビウオ類と上半期のマアジ漁況についてとりまとめました。今回はその結果をお知らせします。

トビウオ類の漁況

県下で漁獲されるトビウオ類はホソトビウオ(丸アゴ)とツクシトビウオ(角アゴ)がありますが、それぞれの漁獲量の経年変動(図1)をみると、丸アゴで290~930トン、角アゴで75~212トンの間を変動しており、年変動の大きい魚であることがわかります。丸アゴと角アゴの変動の間には、一定の関連性はないようで、それぞれ独自の変動をしていると考えられます。

今漁期の漁獲量は7月までの集計ですが、丸アゴで360トン、角アゴで60トンでした。平成10年~21年の平均値に比べ、丸アゴで63%、角アゴで51%の漁獲に留まりました。

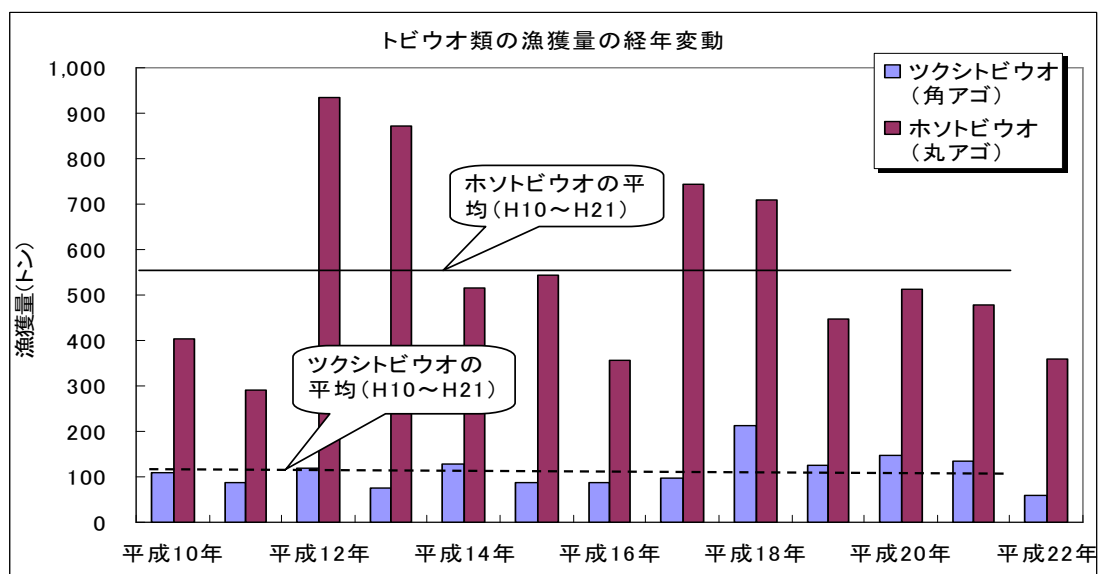


図1. トビウオ類漁獲量の経年変動

今漁期の特徴として初漁期の極端な不漁と漁期後半の7月の不漁があげられます。初漁期の不振は後半のマアジ漁況でふれるような低水温現象に起因したと思われます。

丸アゴは比較的生態の分かっているトビウオ類ですが、本種は産卵のため日本海に回遊してきます。産卵後は死亡し寿命は1年です。夏にはふ化した稚魚が現れ秋には仔アゴが東シナ海へ南下回遊していきます。このような生活史から、秋に仔アゴが多い年の翌年には好漁が期待され、逆に秋に仔アゴが少ない翌年には不漁が予想されます。そこで、仔アゴと思われる9月～10月の漁獲量と翌年(6～7月)の漁獲量との関係を図2に示しまし

たが、このような親と子の量的な変動関係は島根県沿岸ではある程度成り立つようです。ところで、最近(平成20、21年)の秋の仔アゴの漁獲量は減少しています。この原因は今のところ不明ですが、この減少が不漁現象の一因である可能性もあり、今後注視していく必要があるでしょう。

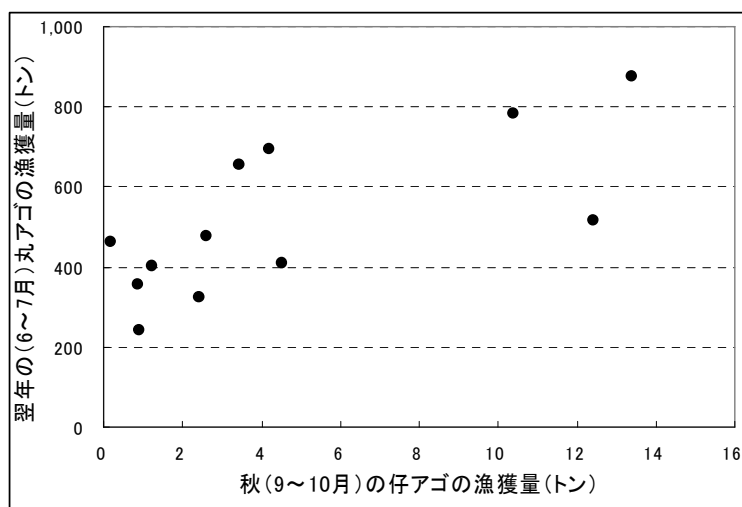


図2. 秋(9~10月)の漁獲量と翌年の漁獲量との関係

上半期のマアジ漁況

マアジは、本県の基幹漁業である中型まき漁業や定置網漁業の漁獲量・生産額の最上位に位置する重要な魚種です。その漁獲量の月変動を図3に示しました。

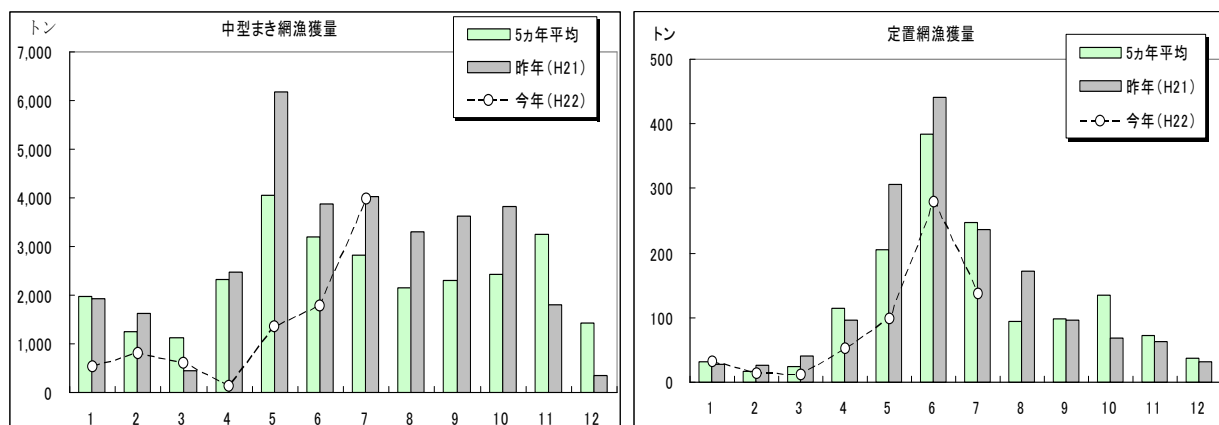


図3. マアジ類漁獲量の経月変動

中型まき網漁業では1～3月にかけては平年・昨年に比べて低調で、例年であれば漁況が上向く4月になっても著しい不漁でした。5月以降やや上向き傾向に転じたものの、前年値・5ヵ年平均値に比べ大きく下回りました。7月になりようやく前年と同程度に回復しました。定置網漁業においても漁獲量は4月以降、前年値・5ヵ年平均値を割り込んで低調に経過しました。

日本海におけるマアジ資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0歳魚として対馬暖流に沿って分布を広げます。越年して1歳魚となると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成します。

すでに「トビウオ通信」でお知らせしていますように、平成20,21年生まれの加入状況は良好でした。従って、今漁期(平成22年上半期)は1,2歳魚に成長した群の好漁が期待されていました。ところが、図3に示したように今漁期の漁況は不漁で経過しました。これは海況に原因があると考えられます。水産技術センターで観測している沿岸定地水温では4月～5月にかけて、浜田(県西部)・恵曇(県東部)とも「かなり低め」～「やや低め」で経過しました。6月上旬で両地区とも「やや低め」であり、中旬になって回復傾向に移行しました。沖合域においても全般に昇温が遅く、5月の50m深における15℃以上のマアジの生息に適した海域は昨年に比べ狭い状況でした(図4)。

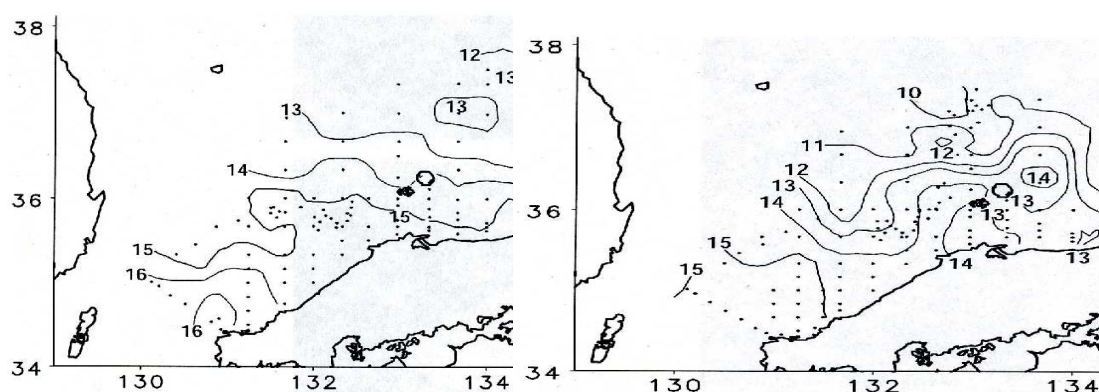


図4. 5月上旬、50m深の水温分布 左：昨年、右：今年(日水研ホームページより)

今期は初漁期からの低水温のためマアジの適水温帯が形成されず、日本海への来遊量が少なかったことが不漁の大きな原因と考えられます。